「高井」第二二〇号別刷

2022.8/1

上野原の戦い、飯山市静間上野説を唱える訳

―長野市岩野での天文二十二年説の検証―

松澤芳宏

上野原の戦い、飯山市静間上野説を唱える訳

―長野市岩野での天文二十二年説の検証―

松澤芳宏

本稿はインターネット小生筆の『上野原の戦い、飯山市静間説を力説する訳』[1]の内容を網羅し、加えて最近の同合戦天文二十二年（一五五三）長野市岩野（妻女山々麓の平地）説に反論を加えたものです。

仰天、甲越合戦の一つとされる上野原合戦を弘治三年（一五五七）とする従来説を覆し、天文二十二年とする説が最近発表されました。[2]

学問の発想の転換は素晴らしいと思います。私も常々心がけておりますが、今回の内容は私の上野原合戦弘治三年静間上野説を否定するものであり、先学の各説を覆すものです。

当然、私は心穏やかではなく、その説の検証をしたいと思います。

まず長野市松代城（海津城）の西方で妻女山の麓に岩野というところがあります。従来より岩野は上野とも書きやすい点注意していたところではありますが、[3]岩野は天文二十四年の七月十三日付け武田晴信書状で上野郷と判明したことが、さらに報道されたから、[4]前嶋敏氏の天文二十二年上野原合戦岩野説に同調した動きも出てきました。

その説の検証で、第一の問題点は現在の岩野は全くの平地で千曲川の氾濫原ということです。岩野は本来から石がゴロゴロしている意味であり、氾濫原ではその意味がふさわしく、発音上で上野の表記に古く取り違えられていた可能性があります。長野市岩野の場合は、上の方の野原つまり通常の上野原を示す概念には程遠いもので

す。

次に歴史上の問題点で、上野原の戦いが越後系の軍記物で弘治二年とされましたが、長尾宗心（上杉謙信）出奔の弘治二年の年次と齟齬することから、弘治三年に落ち着いていました。

これを天文二十二年とするのは、岩野説では、弘治三年では都合が悪いからでありましょう。

つまり、上野原合戦直前の弘治三年八月十五日、すでに雨飾城（松代近辺の尼巌城）周辺を本拠とする武田方東条在陣衆が居り、信玄から奥信濃方面の千曲川右岸（東岸）の戦勝を認められ、千曲川の西岸をうかがっている書状（後記する）があることに矛盾するからです。

そして、天文二十二年の年次を当てられ、八月四日以降の長尾政景の参陣をその理由としているわけです。ところがその書状は弘治三年とされるものであり、天文二十二年ではありません。次に掲げてみます。

史料1　長尾景虎書状

◎上杉家文書（『上越市史』別編1一五〇号）

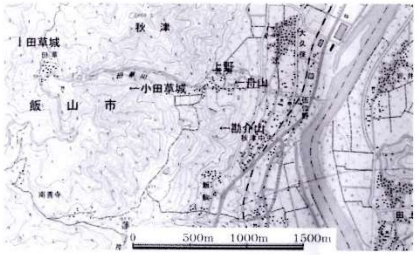
今度以安田（長尾為景）方条々被仰越候、御存分之通、具承分候、然者、御出陣之上、御留守にいたって、自然之義も候ハヽ、御進退のき不可致見除由、暮々承候、是又御よきなきまてに候、既信州之面々衆一旦申通義をもって、数年及加勢候、今日いたるまで令劬労候、況一方ならさる子細ともに候間、争而貴所御事可致見除候哉、其巨細安治へ申わけ候、併於御心腹者御頼敷候、此うへにおいても、若御疑心之義も候ハヽ、以誓書も可申宜候、委細彼方可有雑談候、恐々謹言、

（弘治三年カ）八月四日　　弾正少弼　景虎（花押a）

越前守殿（長尾為景）

この中で「既信州之面々衆一旦申通義をもって、数年及加勢候、今日いたるまで令劬労候」とあるように、信州の面々衆は村上義清ら信州衆を指し、数年来景虎が加勢したとあるのは、天文二十二年村上義清が長尾景虎に頼ったのち、数年を過ぎていることを示し、この文書が弘治三年であることを示しています。

しかも、出陣されては信州の事であり、お留守にいたっては飯山城域の事であり（まだ、城郭として整っておらず泉氏の館城の外郭）、景虎の義兄の政景は前線から外されて、飯山で後詰に当たっていて、不満がたまっていたと考えられます。



上野付近図（国土地理院25000分の1「替佐」を改変）

ともかく、史料1の八月四日付けの景虎書状は天文二十二年ではないことが明らかでしょう。

重要なことは川中島合戦関連について天文二十二年の長尾政景の動向を示す史料は現在一つもなく、長尾政景関係から上野原合戦天文二十二年説を説く根拠はどこにもないと思います。

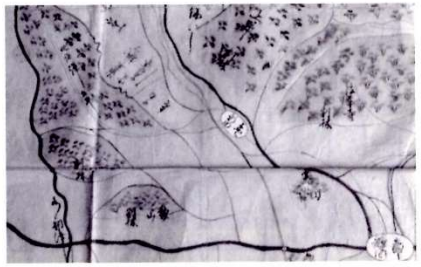
翻って弘治三年こそ長尾政景と上野原合戦のかかわりを説く鍵があると確信しています。

さて、私が上野原合戦飯山市静間田草川扇状地説を唱える訳は、そこに上野（秋津村誌に読みの記述）の地名があるからです。江戸時代慶安四年（一六五一）の水内郡静間村検地帳に上野が見え、元禄八年（一六九五）静間村絵図に上野新田・上野割林・勘介山が記載されています。

また、後記する史料、弘治三年と推定の、感状案三通には、信州上野原と書いてあるだけであり、長野市若槻の上野に当てる説が有力視されるのは、江戸時代後期の軍記物『甲越信戦録』に、長野市の西部山中らしい記述があるからです。さらに、最近の有力研究家が皆そこを重視しているからです。

しかし、それはまだ、静間の荒舟近辺の上野地名が流布していなかったからで、飯山城の南、約三・五キロメートルのこの位置は、飯山城の前線として重要な位置を占めています。また、付近に飯山地方最大級の大きさをもつ山城、小田草城や田草城があります。

私はこの小田草城を武田氏の言う亀蔵城の最大拠点と推定しています。一方、武田方からは飯山の軍勢の動きを一望に捉える絶好の場所であり、舟山の陣所らしい丘



元禄８年静間村絵図記載の上野

飯山市綱切橋付近から見た上野

つまり、永禄七年以前の飯山城は輝虎が善光寺平出陣の基地として利用するには便利だが、それ自体の防御性は低く、周辺の山城群と一体的な防御体制と見られます。この周辺の山城群を上倉氏（泉一族とは断定できない）を筆頭に泉一族も守っており、それを代表して亀蔵城自落退散の祈願を永禄三年九月に武田信玄が佐久郡松原社に祈願しているわけです。

願文で、ことに、十日以内の亀蔵城自落退散と越後軍への勝利を祈願しているのは、実際はそれ以上の手間がかかると踏んでいるからで、私は越後方の陣地は飯山城一つではないと主張しています。

次に、善光寺平包含圏の末端、飯山までも武田勢が攻め込んだかについては、すでに弘治三年と推定の三月二十三日付け長尾景虎書状では、飯山に武田勢が迫っており長尾政景に飯山の応援を景虎（上杉謙信）が頼んでいます。

このころの飯山は飯山城とは断定できず、飯山付近一からは飯山城をはるかに望めます。

ただし、弘治三年の飯山城は自然丘の頂上に泉氏の館（やかた）城（じょう）があったのみで、広大な丘の周りに堀をめぐらすことはなかったと推定され、永禄七年（一五六四）に上杉輝虎が本格的築城を行っています。永禄七年の上杉輝虎の川中島出陣は、飯山築城を擁護する意義もあると思います。

帯が飯山口などの表現に移行しています。

弘治二年[5]に、高梨政頼が飯山に逃げてきているのは、飯山近辺の志妻郷（飯山市静間）が高梨領であることからであり、そこともとれます。志妻郷の小田草城や田草城は高梨領です。

また、このころの善光寺平の情勢については次の、『信濃史料』にはない新史料が重要です。

史料要約２　武田晴信書状

◎大阪城天守閣所蔵文書（『戦國遺文武田氏編』五六三号）を改変

各々がよく働かれるので、そちらの備（千曲川右岸の東条と綿内）が、万全であるのは喜ばしい。当口（千曲川左岸地帯）のことは、春日・山栗田が没落し、寺家（戸隠山顕光寺）・葛山は人質を出してきた。島津氏については、今日降参の趣を伝えてきている。もとより、同心が通ずられているので心配はない。この上は、つまるところ相極め、東条と綿内、真田方（幸綱）衆と申合って武略を専一にしてほしい。只今は時節到来とみたので、聊かも、油断してはならない。恐々謹言。

追って、内々に□島（長野市綱島か）辺に在陣したが、もしも越後衆が出張してきたならば、備えは如何にと、各々が意見するので、佐野山（千曲市桑原付近）に馬を立てた。両日人馬を休め、明日は行動を起こしたい。

七月六日（弘治二年）　　晴信（武田）（花押）

小山田備中守（虎満）殿

これでみると、善光寺平すべてが、武田晴信の手中にあり、その後一時、長尾景虎が巻き返しを図ったが、まもなく八月上旬に、景虎本隊が越後に引き返したと見られる行動がありました。[6]

善光寺平は越後勢が希薄となり、残すは飯山付近のみが越後勢の拠点となったのです。

将軍足利義輝の和睦斡旋もあって両軍の将が率いる主力部隊が善光寺平から姿を消しました。

このとき、晴信は深志で指揮を執っていたと推定されていますが、善光寺平で作戦の要にいた人物は誰であったのでしょうか、次に史料を掲げましょう。

史料3　武田信繁書状

◎尊経閣文庫所蔵文書（『戦國遺文』四四九号）

武田氏編

御書奉披見候、敵相揺之由注進候、至□無其儀候、
景虎ハ越後へ罷越候、爰許普請大形出来候、駿・遠
之義承届候□、別義候ハヽ、可被仰下候、此旨宜預披
露□、恐々謹言、

左馬助
信繁（花押）

（松軍注釈弘治二年）
八月十日

大井弥次郎殿

この解釈については注3に述べましたたが重要であるので再編したいと思います。史料3は『戦國遺文』では天文二十四年（弘治元年）と推定していますが、文中景虎が越後へ帰っているという文言があります。天文二十四年は対陣が長く続き八月十日に景虎が帰っていないことは明白です。

信繁が景虎の動きを熟知しているのは、信繁が善光寺平にいる証拠ではないでしょうか。つまり、弘治三年八月善光寺平左岸地帯で晴信の代わりに指揮をとっていたのは晴信の弟の武田信繁の可能性があります。

越後方の軍勢が揺るぎだし、景虎本隊が越後に帰ったことを大井氏に報告し、さらに城普請をしていることを伝えています。東条は真田氏らが守備しているので、信繁普請の城は千曲川左岸地帯の塩崎城か佐野山城が候補となります。あるいは注4に記す天文二十四年七月前後からの綱島再興にかかわるものかもしれません。

陣中にもかかわらず普請が大方出来たといっているのは海津城のような大規模な城ではないでしょう。塩崎城には甲越合戦時の改修の遺構が現在残っているといわれます。

八月十日ごろ、景虎が越後に返ったのち、飯山付近は長尾政景が在陣していたと思われます。そこの守りが希薄とみて、武田方東条在陣衆が千曲川の東から西に踏み込み、上野原合戦となったと推定します。[7]

次の文書は合戦目前の日付で、注目に値します。

史料要約4　武田晴信書状写

◎「古文書纂」（竪切紙）二十九所収沖野安次郎氏所蔵文書（『戦國遺文武田氏編』五七四号）を改変

今日の各々の働きは（勝利して）心地よい。今後は、千曲川の浅い深いを見届けられ、川を渡ったならば、今日の戦いようには行かないので、気をつけた方がよい。相談して失敗がないように、てだてを考えよ。恐々謹言。

（弘治三年カ）
八月十五日　　晴信（武田）（花押影）

東条在陣衆各

武田晴信が特別に千曲川を渡ることを強調していることは、その対象が綿内以北であり、善光寺平包含圏北半の千曲川左岸地帯で上野原合戦があったことを意味しています。

飯山へは延徳沖の大湿地帯が難所ですが、その東をめぐる道もあり、逆に千曲川の自然堤防をたどれば一気に北進が可能です。

当時、高井郡内では武田方についた土豪が多く、高梨氏の中野小館残留勢力も、あくまで江戸時代の伝承であり、僅かな勢力では武田氏に到底抵抗できるものではありません。

そして十日前後過ぎて、一般に知られる次の史料があります。

史料5　長尾景虎感状案〔歴代古案〕一

（『信濃史料』第十一巻）

今度於信州上野原一戰、動無比類次第ニ候、向後弥
抽之事肝心候、謹言、

（弘治三年）
八月廿九日　　景虎（長尾）

南雲治部左衛門とのへ

史料6　長尾政景感状案〔歴代古案〕四

（『信濃史料』第十二巻）

於今度信州上野原一戰、動無比類次第候、向後弥可
相抽事簡心候、謹言

（弘治三年）
八月廿九日　　政景（長尾）

大橋弥次郎（藤組）殿

史料7　長尾政景感状案〔歴代古案〕四

（『信濃史料』第十二巻）

於信州上野原、對晴信、遂合戰、得勝利候剋、神妙
之動無比類候、向後彌可被稼事專要候、謹言、

「弘治二年戊牛」
九月廿日　　政景
下平弥七郎殿

史料8　長尾景虎感状案（歴代古案）八

（『信濃史料』第十二巻）

今度信州於河中島高名、殊面白者討捕、無比類事神妙候、以来義可嗜候、依之小島分一騎前出置也、
八月廿二日　　景虎御書判
福王子兵部少輔殿

史料5と6は長尾景虎と長尾政景の書状案ですが、文面が一緒で、本来政景の書状案であるのを、後世一通を景虎に書き直されたこともあり得ます。

史料7を含めて確実のところ、二通が政景の書状案であることは、小林計一郎氏が指摘されるように越後方の主力は長尾政景隊と考えられます。[8] 政景の飯山との関わりは、弘治三年の春より始まっていたことは周知されています。また、史料7の「晴信に対し」とあるのは、晴信の軍勢に対しと早くから理解されています。

なお、政景隊が弘治三年八月下旬に、狭義の善光寺平に在陣しているという意見ついては、景虎本隊が越後に帰っている（帰るそぶりを見せたという意見もある）現状ではあり得ないと思います。政景隊と東条在陣衆が長野市付近で衝突したと考えるよりも政景隊や地元衆が守っていた飯山付近で上野原合戦があったと考える方が自然でありましょう。

ちなみに、史料8については、上野原合戦の年と混同される方がありますが、弘治三年には松代付近では武田方東条在陣衆が堅く守っており、八月に越後方が川中島に出ることはあり得ないと思います。この史料は信濃史料の天文二十四年説が正しいと思います。

以上、弘治三年と推定の上野原合戦を飯山市静間上野付近に当てる訳が理解できると思います。決して無謀とは思えませんが、断定は差し控えます。長野市松代町岩野や若槻上野に断定することこそ、合戦が川中島の近くで行われているという、先入観によっていることを自覚すべきです。

このころの晴信の所在については、『千野文書』に

「小谷城御本位の時分（中略）、高白斎をもって深志の対面所へ召し出し、比類なく相挙の由、御褒美候事（信濃史料第十二巻百七十五頁）」とありますから、晴信が深志城にいることは確実であります。

また、先記した史料要約4の晴信書状写よって、八月十五日に晴信が深志城から指令を出していることが解ります。

従って、上野原の戦いは、武田方東条在陣衆と長尾政景等飯山口在陣衆との戦い、すなわち甲越戦争の局地戦であると私は考えています。長尾景虎についても一旦越後に帰った後、再び参陣したか、戦いの後に飯山口に入ったかは明らかではありません。

勘介山より飯山方面を望む（昭和41年）

なお、私の上野原合戦静間説の原点は、小学生のころ祖父が私に語ったことにあります。

「昔、舟山と田草川を隔てて戦争があり、武田方は舟山に上杉方は山の神に立てこもって戦いをした。だから山の神には矢の根石がたくさん落ちている。この一帯は上野原といって、大久保集落の草分けである大下の家は、昔、上野原から下りて、大久保に在住した。それで、姓を上原に名乗っている。」

矢の根石は縄文時代で時代が合わないと、中学生の時には、この話を馬鹿にしていたが、還暦をすぎて真剣に上野原合戦静間説を唱えるようになったのは、単なる伝承も馬鹿にしてはならないという戒めと感じております。

なお、上野原合戦静間説の場所は現在の飯山市秋津農村公園（正式にはとんぼの里公園）の辺りを含む所であり、江戸時代に上野新田という集落があり、現在も上野堰の名称が付近にあります。

近隣には、田草城・小田草城という大規模な軍事拠点があり、何千という軍勢をおける場所です。上野からは飯山城を眼下に望むことが出来、この地域の確保が長尾景虎方（上杉方）にも、武田方にも、最重要なことであ

り、武田勢も田草城・小田草城を通り抜けて飯山城に迫ることはできません。また、飯山城自体も当時どの程度の防御能力があったかは不明です。

あるいは、田草・小田草城あたりが越後方の最大拠点であったかもしれませんし、高梨政頼の支配地域であることは判然としています。高梨氏が、弘治二年に飯山地方に入ったのは、早くからの領地である田草城・小田草城のあたりとも考えています。越後方の最大拠点である両城の前線地帯の戦いが上野原合戦である可能性は大でしょう。

以上の状況から、上野原合戦静間説を力説するわけがお解りかとおもいます。皆さんもとんぼの里公園を一度訪ねられてはいかがでしょうか。

注

（1）『松澤芳宏の古代中世史と郷土史』の一項二〇一〇年編集開始二〇一六年追記。

（2）前嶋敏『謙信・信玄と「川中島の戦い」』新潟県立博物館平成二十九年度秋季企画展図録『川中島の戦い』上杉謙信と武田信玄。

（3）松澤芳宏「上野原の戦、飯山市静間説の新展開」（上）（下）―弘治二～三年甲越合戦の真相―雑誌『信濃』第六十一巻第九・十号　通巻第七百十六・七百十七号　平成二十一年刊行。

（4）信濃毎日新聞令和四年二月二十八日の記事、並びに同新聞同年三月十一日村石正行「川中島合戦めぐる一級史料発見」『しなの歴史再見特別板』。

（5）金井喜久一郎「木島神社」『飯山市誌歴史編上』第二編第四章第三節所収、飯山市刊行一九九三年で高梨氏中野退去弘治二年説を打ち出した。その後、私は注3で長尾宗心（上杉謙信）出奔を示す文書との整合性を確認。さらに、松澤芳宏「直江實綱書状からみる長尾宗心出奔の事情―高梨氏飯山口応援依頼の越後方返答から―」、雑誌『信濃』第六十三巻第九号　平成二十三年で再確認。

（6）注3に述べた。

（7）注3に同じく述べた。

（8）小林計一郎『川中島の戦』春秋社、昭和三八年。